九州看護福祉大学紀要
Vol, 10, №1, 41-49（平成19年度）
ISSN 1344-7505

［研究報告］

母性看護学実習を効果的にするための事前準備に関する検討　第二報

～三年次演習前・演習後・実習後アンケート結果から～

坂井邦子、緒方妙子、原田美智、江島峰子

【要　旨】　母性看護学実習における実習の目的は、学内での知識・技術・態度の統合を図り、受け持ちケースや外来妊婦、出産に立ち会うことにより、人間関係能力を高め、看護実践能力を高めることであり、実習を効果的にするには事前準備が重要な鍵である。

K看護大学が、これまで母性看護学実習の事前準備として実施してきた講義・演習が実習を行う上で効果的であったかどうかを検討するために、演習前・演習後・実習後に学生にアンケートを実施した。その結果、従来からのTheme Reportは実習前準備として学生にとって負担が大きく、実習地では計画の変更も多いことが明らかになった。そこで、実習の目的を達成するには、Theme Reportの目的を変更することが重要な鍵といえる。

キーワード：母性看護学実習、人間関係能力、ワークブック、関連図 、Theme Report

【はじめに】

看護学教育における臨地実習は、学生が学内で学習した知識・技術・態度の統合を図り、看護実践能力の基本を習得するために重要かつ不可欠であり、さらには、看護に必要なコミュニケーションを基盤とした人間関係形成能力を育成・習得する学習の場であるといわれている。[1)] 厚生労働省では、平成 15 年 3 月「看護基礎教育における技術教育の在り方における検討会報告」[2)] を提示している。報告書の内容を見ると、学士課程における看護学教育は過密であり、学生の主体的学習環境を整える意味からも教育課程の見直しや教育内容の精選の必要性が述べられている。

K 看護大学では、2 年次前期に母性看護学講義 3 単位、3 年次に実習前演習 30 時間、母性看護学実習 2 単位を実施している。これまでの実習の状況をふまえ、平成 19 年度からの演習において二つの改善を試みた。第一に、実習で必要とされる知識を求めた課題レポートから、妊娠期から産褥期までの事例を提示したワークブック形式の内容に変更した。第二に、看護過程展開の能力を充実させるために、看護過程の記録用紙に、全体像を把握させるための関連図を作成させた。ただし、Theme Report は、母性看護学の統合を図り、思考能力を高め、問題提起や研究を行う素地として開学以来求められており、課題はそのままとした。

今回、K 看護大学が母性看護学実習における実習目的・目標が、報告書の内容に掲げる看護実践能力育成や人間関係形成能力の視点から適切であるかどうか、母性看護学実習準備としての講義・演習が効果的であったかについて、学生を対象にアンケートを実施した。調査内容は、実習前演習における①ワークブックの活用、②関連図作成、③Theme Report、④妊産婦及び新生児における基礎看護技術、⑤講義方法の 5 項目とし、実習前準備として効果的であったかどうかを探った。

【方法】

調査対象：本学看護学科 3 年生　137 名

調査回数：演習前・演習後・実習後の 3 回

調査期間：平成 19 年 4 月～平成 20 年 1 月

調査方法：選択回答、および一部自由記載の自記式質問紙調査

回収部数：演習前 129（回収率 94%）、演習後 136（回収率 99%）、
実習後 123（回収率 89%）

回収方法：演習初日、演習最終日および実習最終日に回収

倫理的配慮：対象学生には、調査の主旨と目的について文書及び口頭にて行った。また、調査用紙は無記名とし、プライバシーに配慮していることや、成績や評価に全く関係していないことを

明記した。アンケート調査協力は自由意志で、回収は回収箱にて行った。

母性看護学講義:講義3単位(60時間)2年生前期(オムニバス形式で4人の教員で担当)

母性看護学演習：3 年生実習前 30 時間（演習内容、演習方法、演習項目については、母性看護学実習を充実するための効果的な事前準備に関する検討　第一報に例示）[3)]

母性看護学実習：2 単位、母性看護学実習の目的目標は、母性看護学実習を充実させるための効果的な事前準備に関する検討　第一報に例示）[3)]

実習施設 12 か所：(公立病院 6 か所、私立病院 3 か所、医院 1 か所、 助産所 2 か所）指導体制（母性・助産教員 4 名、非常勤実習助手 3 名）

分析方法：演習前・演習後・実習後の 3 回に分け、アンケートを実施した。データーの統計処理には Excel を用い、調査項目毎に単純集計を行った。

【結　果】

1．ワークブックの活用について

ワークブック活用についての学生のアンケート結果を（図 1－1）から（図 1－5）に示す。

1）演習前

演習前のワークブックの活用については、98%の学生が、少なくとも演習前課題については終了したが、2%の学生が「演習前の課題も終了していない」という回答であった(図1－1)。また、ワークブックに対する興味関心は、「はじめから興味関心を示した」12%、「やっていくうちにだんだん興味がわいてきた」67%、「やっていくうちに難しくて興味が持てなくなった」18%であった。

図1-1. 課題はどれくらい学習したか(演習前)

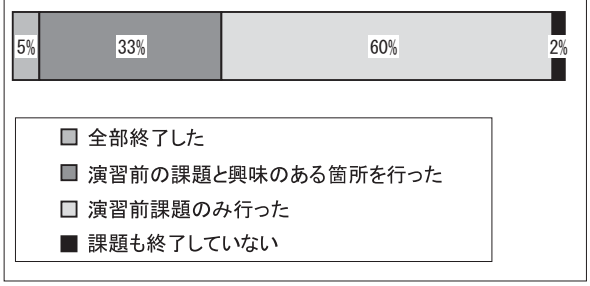


図1-2. 興味を持ってできたか（演習後）

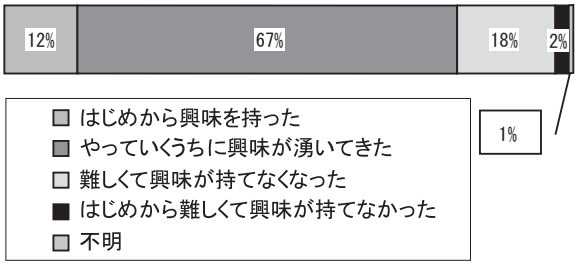


図1-3. 課題は実習で役に立ったか（実習後）

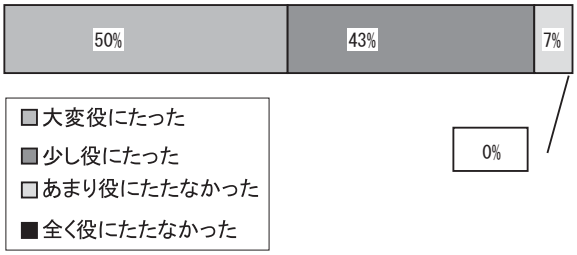


図1-4. 実習で活用できたか（実習後）

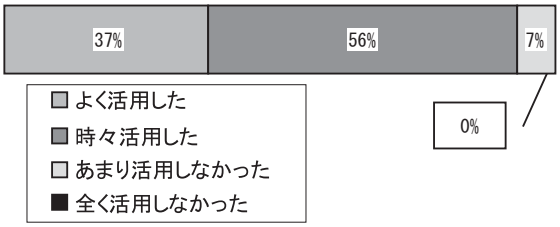
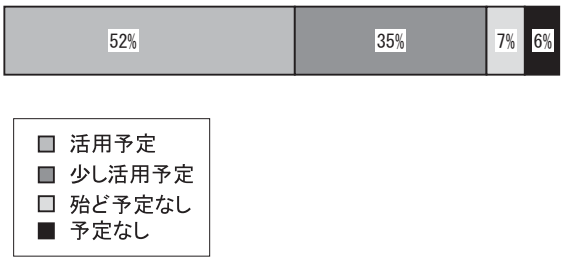


図1-5. 国家試験に向けての活用予定（実習後）



79％の学生がワークブック形式で課題を解くことに興味関心を示していた（図 1－2)。答えが見出せなかった時の対応は、「そのままにしていた」22％、「教員に尋ねた」１％、「友人と調べた」29％、「自分で調べた」48％であった。自由記載では、「事例に基づいて学習を深めていくタイプだったのでわかりやすかった」、「初めは大変だと思ったが、参考書やテキストなどを活用して学習した」、「教科書では書いてないことがあり困った」等の意見が得られた。

２）演習後

自由記載では、「演習前にワークブックを作成していたので演習内容がわかりやすかった」、「今回の演習で解剖や生理と看護援助が結び付けられた」等の意見が得られた。

３）実習後

ワークブックの課題が、実習で役に立ったかについては、「大変役に立った」50％、「少し役に立った」43％、「あまり役に立たなかった」7％、「全く役に立たなかった」0％であった（図 1－3)。役に立った活用した学生の意見としての理由は、「自分でまとめていたので頭に残っていて実習しやすかった」、「実習中に使うことが多く、大変役に立った」、「ワークブックで学習したことが、そのまま問われたので、持ち歩きながら実習を進めていくことができた」、「事前学習していたので、現場で実際ケアしてみて頭に入りやすかった」、「経過に沿ってまとめてあるので、見やすかった」、「分からないとき活用した」等が得られた。一方、活用しなかったあるいは少しだけ活用した意見として、「事前に学習していなかった」、「妊婦が少なかった」、「受け持ちが妊婦ではなかった」、「殆ど教科書を活用した」、「提出が早かったため忘れていた」、「解答がなかったので、あまり見ることがなかった」、「書くのにいっぱいで覚えきれなかった」、「受け持ち患者にワークブックにない項目があった」、「足りない項目があった（帝切や NICU)」、「持ち歩くことができなかった」等が得られた。実習中におけるワークブックの活用についは、「よく活用した」37％、「時々活用した」56％、「あまり活用しなかった」7％、「全く活用しなかった」0％であった（図 1－4)。

今後、国試に向けてワークブックを活用するかどうかについては、「活用予定」52％、「少し活用予定」35％、「殆どあるいは全く活用の予定なし」13％であった（図 1－5)。

自由記載の意見では、実習で役に立ったかどうかの理由と同じ内容であった。その他の意見としては、「手書きで大変だったが頭に入った」、「分かりやすかった」という意見がある一方で、「提出が早かったため忘れた」、「質問が分かりにくかった」、「解答がほしかった」、「目次が欲しかった」、「探すのに大変だった」、「書くところが狭かった」、「少し異常の妊婦の例があるとよかった」、「コンパクトにして欲しかった」等が得られた。

２．看護過程の関連図作成の導入について

看護過程の関連図作成の導入についての学生のアンケート結果を（図 2－1）から（図 2－4）に示す。

図2-1. 演習は実習で活用できるか（演習後）

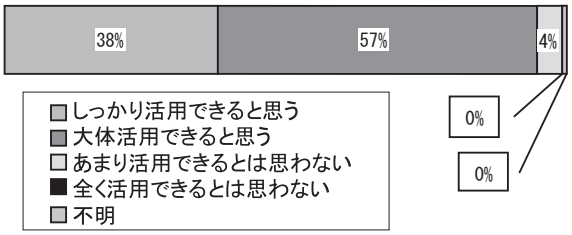


図2-2. 書き方が理解できたか（演習後）

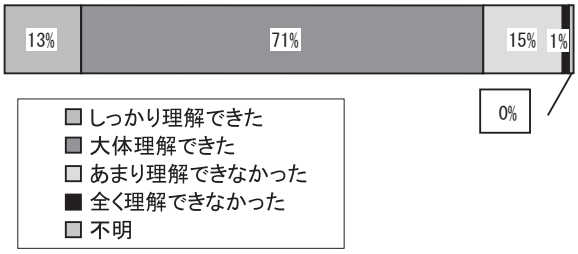


図2-3. 演習は役に立ったか（実習後）

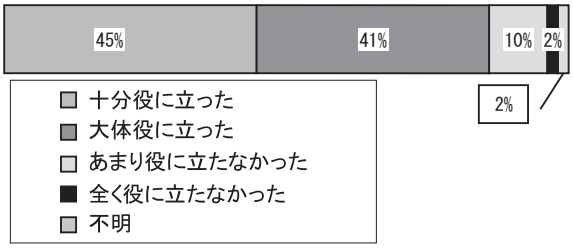
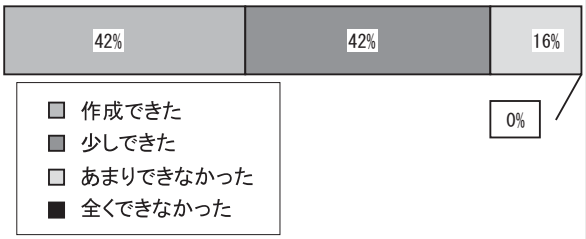


図2-4. 作成させることができたか（実習後）



１）演習後

実習地での関連図作成の活用については、「しっかり活用できた」38%、「大体活用できた」57%で、95%の学生が活用できていた。「あまり活用できなかった」4%、「全く活用できなかった」0%であった（図２－1）。

関連図の書き方が理解できたかについては、「しっかり理解できた」13%、「大体理解できた」71%、「あまり理解できなかった」15%、「全く理解できなかった」0%であった（図２－2）。

２）実習後

看護過程の演習が実習で役に立ったかどうかについては、「十分に役に立った」45%、「だいたい役に立った」41%、「あまり役に立たなかった」10%、「全く役に立たなかった」2%であった（図２－3）。

受け持ち患者の看護過程において、関連図を作成できたかの問いでは、「作成できた」42%、「少しは作成できた」42%、「あまり作成できなかった」16%、「全く作成できなかった」0%という結果であった（図２－4）。

作成できた理由としては、「自分なりに作成できた」、「一度演習でやっていたので作成できた」、「演習時の資料を活用した」、「アセスメントができた」等があった。一方、作成できなかった理由として、「情報不足」、「質問に答えられない」、「広く浅くしかできていなかったため、どう援助の方向性をもっていくのか考えきれなかった」等の意見があった。

３．Theme Report の学びについて

Theme Report の学びについての学生のアンケート結果を（図３－1）から（図３－6）に示す。

図3-1. 作成過程が把握できたか（実習後）

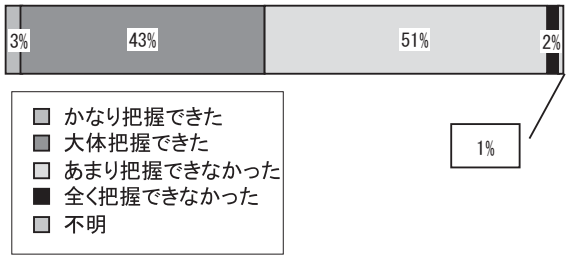


図3-2. テーマが絞れたか（演習後）

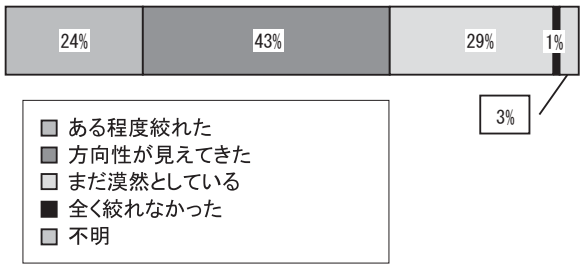


図3-3. 実践計画ができたか（演習後）

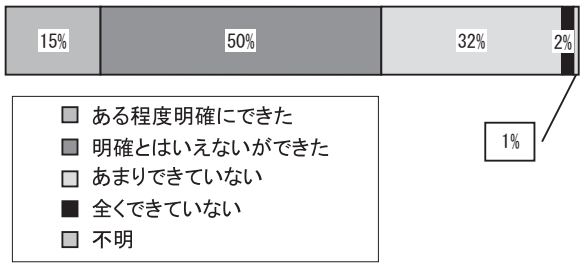


図3-4. 文献検索の方法の理解（演習後）

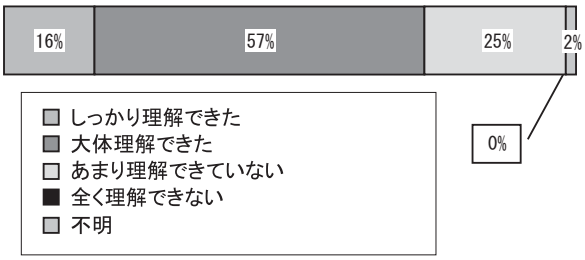


図3-5. 演習は役に立ったか（実習後）

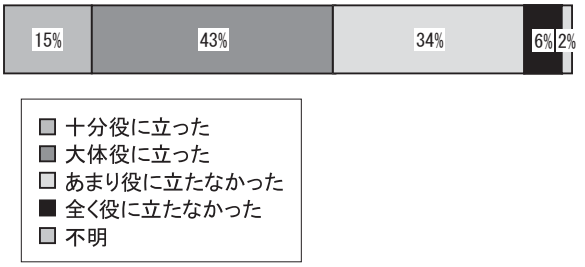
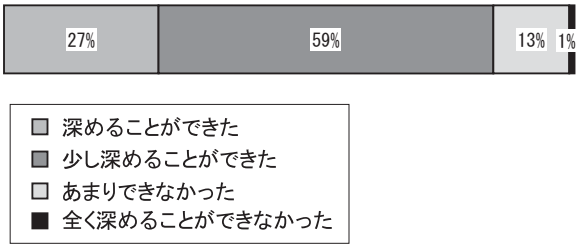


図3－6. 対象理解に役に立ったか(実習後)



1）演習後

演習後のアンケートからは、作成過程が把握できた学生は半数以下の 46%であった。演習時の説明では、半数以上の学生が作成過程を把握できていなかった（図 3－1)。

また、「テーマが絞れたか」の問いでは、「ある程度絞れた」、「方向性が見えてきた」を合わせて67%であった（図 3－2)。

「実践計画案ができたか」の問いでは、「ある程度できた」、「明確とはいえないが計画案ができかた」を合わせると 65%であった（図 3－3)。

自由記載の感想としては、「自信がない」、「理解できない」、「したくない」、「時間が短い」、「見てもらうのに時間がかかる」、「効率よくして欲しい」、「わからない」等の意見があった。

「Theme Report における文献検索方法は理解できたか」の問いでは、「しっかり理解できた」あるいは「大体理解できた」を合わせると 73%であった。「あまり理解できない」は 25%であった（図 3－4)。

2）実習後

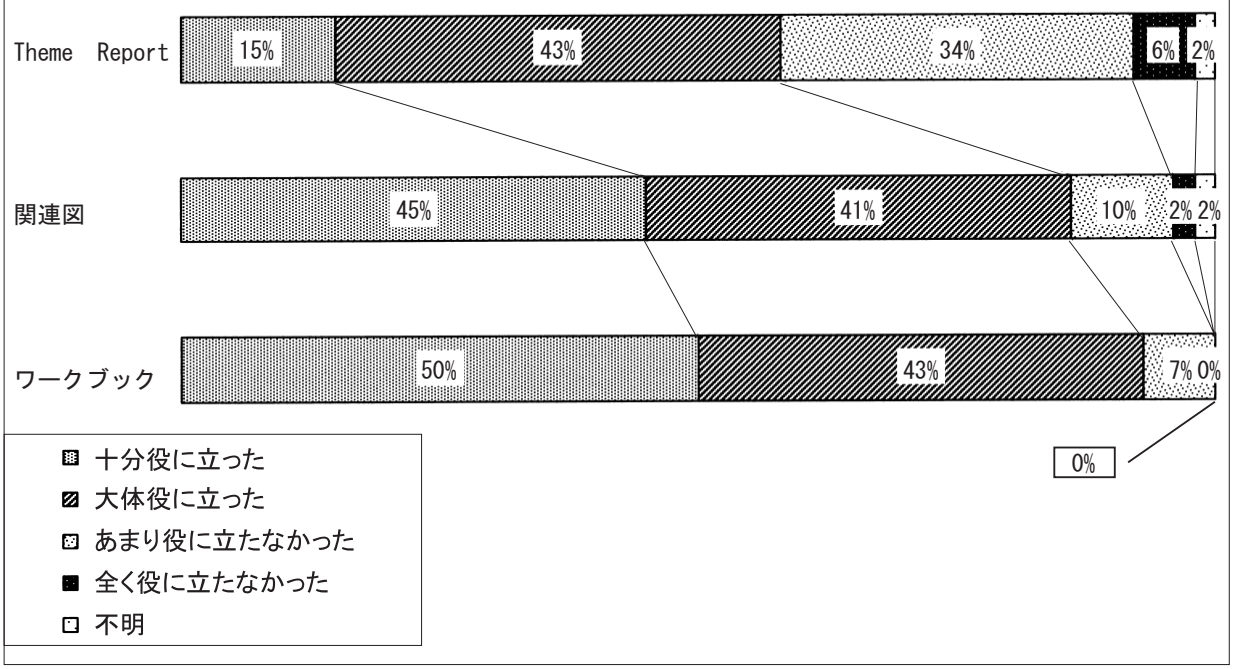
「Theme Report の演習は臨地実習において役に立ったか」の問いでは、「充分役に立った」15%、「だいたい役に立った」43%、「あまり役に立たなかった」34%、「全く役に立たなかった」6%であった（図 3－5)。

「Theme Report を通して対象理解が深められたか」の問いでは、「対象理解が深められた」27%、「少し深められた」59%、「あまりできなかった」13%、「全く深められなかった」1%であった（図 3－6)。

Theme Report を実施しての学びとしては、「インタビューで様々な意見を聞くことで対象理解につながった」、「妊産褥婦の生の声や思いが聴け、視野が広がったなどがあった」等があった。その一方で、「テーマが漠然としていた」、「アンケートの作り方がよくなかった」、「毎日 Theme Report に追われ実習に集中できなかった」、「書き方が分からなかった」、「対象者が少なかった」、「難しかった」、「現場で変更させられた」等などがあった。

実習前準備として、Theme Report、関連図作成、ワークブックの活用について比較すると、実習後から（図 4）の結果が得られた。

図4.　実習前準備はどの程度役に立ったか（実習後）



４．妊産婦及び新生児に対する基礎看護技術

実習後のアンケート結果から、妊産婦に対しての看護技術に関しては 89%の学生が役にやったと回答していた。また、新生児に対する観察や沐浴の基礎看護技術に対しては 95%の学生が役に立ったと回答していた。(基礎看護技術の項目についてはここでは省略する。

５．講義について

講義に関する意見・要望としては、「楽しくて分かりやすい」という意見があった。一方、「ビデオ学習が多すぎて頭に入らなかった」、「講義中に演習を入れてたくさん実施しておきたかった」、

「講義と実習が 1 年も空いてしまうと忘れてしまっていた」、「看護過程について、時間をかけて看護計画立案の仕方やアセスメント・関連図の書き方について詳しく教えて欲しい」、「実習のことを見通した看護過程や国試対策ができるような講義をして欲しい」、「学生が筆記しながら講義を受ける方が理解しやすかった」等の意見が得られた。

【考　察】

実習前準備として看護学演習において実施したワークブックの活用、関連図作成、Theme Report については、(図 4) に示すように Theme Report が役に立ったとする学生が、他の項目に比較し 58%と低い値であった。これらの結果から、母性看護学実習を効果的にするための事前準備に関して考察した。

１．ワークブックの活用について

「演習前にワークブックを活用しての感想」では、事例を提示したことで、「初めから興味をもった」、「やっていくうちにだんだんと興味が湧いてきた」が80%近くあった。このことは、妊娠・分娩・産褥と事例の経過を追って課題を提示していることにより、事例をイメージ化でき興味関心が湧いてきたことを示している。しかし、答えが分からなかった時の学生の対応について、78%の学生が「教員に尋ねた」、「友人に聞いた」、「自分で調べた」のに対して、22%の学生は答えを見出すための行動を何も起こしていないという結果であった。

演習中は、「事前にワークブックを活用し、課題に取り組んだことで、演習内容の理解につな

がったとする意見」が多かった。実習中も殆どの学生が、ワークブックを活用しており「実際看護してみて頭に入りやすい」という意見が多かった。実習後も「国試に向けて活用したいと思っている」が 87%あり、「昨年までの事前学習レポートの国試に向けての活用は 73%」[3] に比べ増加していた。ワークブックでは、講義で学んだ知識を応用して課題に取り組むことが求められる。さらに、このワークブックにおける課題では、必要な知識と技術を一体化させて展開する上でも効果的である。今後も演習前の課題として、このワークブックを、演習前に取り組ませ、わからない課題に対してもそのままにせずに課題に取り組むように指導することが必要と考えられる。「課題がわからなかった時自分で調べない」22%の学生をどう指導するかが、今後の課題となる。

２．看護過程への関連図作成の導入について

専門職者としての看護は、計画的・意図的であるとされている。そのために、看護過程展開能力は、看護者にとって重要な能力である。K 看護大学ではこれまで、看護過程の記録は求められていたものの、看護問題を１つか２つあげて情報収集・分析を行い、計画立案をするものであった。その結果、何故その看護問題がとりあげられるのかを理解できない一面があった。学生が看護を計画的に展開するにあたっては、看護アセスメント能力が重要と考えられる。そこで、対象の全体像をどのように把握し、看護問題をあげるに至ったのかを明確にするために関連図作成を導入した。学生は積極的に看護過程の関連図を活用しようとしていることが分かる。

また、実習終了後の結果から、関連図作成過程において、観察不足や情報不足を学生自らが気づくという効果が確認された。さらに、看護計画を立案する過程において、学生自身が自己の学習不足を感じるという結果が得られた。このことは、看護過程の習得には、基礎となる理論や知識の習得が必要不可欠であることを示している。看護過程の能力獲得には、基礎的能力を十分に培い、各場面で繰り返し具体的展開を行っていくことが重要である。

３．Theme Report の学びについて

Theme Report は、母性看護の統合を図り、看護者としての問題提起や研究を行う素地を養う目的で行われてきた。[3] しかし、演習後のアンケート結果からは、作成過程が理解できないという学生が半数以上にみられた。学生は、演習時に Theme Report の説明を聞いただけでは、実習施設のイメージができず、実習内容を充分に理解していないため、Theme を見出せない状況にある。実習前には、病院実習のことで頭が一杯で余裕がなく、研究としての Theme を探し Theme を絞込むことは学生にとっての負担が大きかったと考えられた。また、実習地では、Theme や計画の変更が多い。一方で、Theme Report の効果としては、「インタビューで様々な意見を聞くことで対象の理解につながった」や「対象の生の声や思いが聴け、視野が広がった」の意見があった。

これらの結果から、学生は、Theme について対象と直接コミュニケーションを図り、対象の理解につながっていることが明らかになった。Theme Report の目的をコミュニケーションの手段として用いることで、学生のコミュニケーション能力不足の解消につながり、人間関係形成能力育成に有効になるといえる。

４．妊産婦及び新生児に関しての看護技術について

看護基礎教育の充実に関する検討会報告書[4] では、学生が看護技術を実施する際の水準を「単独で実施できる」「指導の下で実施できる」「学内演習で実施できる」「知識としてわかる」以上の４つに分類されている。しかし、今回調査したアンケートは、「経験できたか」及び「見学できたか」あるいは「説明を受けたか」の区別であった。学生が実習地で経験する場合は、必ず教員もしくは指導者の指導・監督のもとで実施してきた。これは、看護を提供される対象者の安全・安楽を保障するためのものである。学生は講義・演習で学んだことを指導・監督の下で実施することで看護実践能力が強化できる。Benner は、看護学生を臨床実践能力獲得段階において、経験がないことから初心者と位置づけ、技能を修得していくためには、臨床での経験を積み重ねていくことの重要性を示している。[5]

演習は、学生が実際に行ってみることによって、知識不足や技術不足を再認識する効果がある。学生は演習の段階で自分の知識不足、技術不足を確認し、不足内容について十分補習しておく必要がある。また、演習の時期については講義の時期と切り離すのでなく、講義の中に組み込むことにより学生のイメージ化を助けると同時に、講義に対する興味関心を図かれるように改善していきたい。

５．講義について

学生に事前に到達目標を明確にすることが大切である。そのためにも学生に毎回の授業内容を明確に示す必要がある。母性看護学はオムニバス形式で４人の教員が講義を実施しているが、学習目標に沿った授業内容とし、学生はシラバスを参考に授業の予習を行う必要がある。そのためには、教員間で授業内容について十分に吟味し、内容を整理し確認しておくことが重要と思われる。また、教材として活用するビデオは、教育内容を理解するためのものであり、ビデオで何を見て欲しいのか、何を感じて欲しいのか学生に対して明確に示す必要がある。

今回のアンケート調査結果を参考にし、教員自身が、学生の様々な意見に耳を傾け、必要に応じて、改善していかなければならない。また、教員自らが積極的に研修会等に参加し、常に自己研鑽を積みながら、学生が到達目標に近づけるように日々努力を重ねていかなければならないと考える。

【結　論】

今回、演習前・演習後・実習後にアンケート調査した結果、以下のことが明らかになった。

１．事例を提示し、経過に沿ったワークブック形式の課題は、単に知識のみを記述させる課題よりも事例に興味を示しながら課題に取り組むことができた。

２．看護過程の展開における関連図作成は、受け持ちを理解させるのに効果的であり、実習において有効であった。

３．Theme Report は、研究の素地の目的で実施するのでなく、コミュニケーションを円滑に図る上で有効な手段の一つであり、人間関係形成能力を育成するうえからも実習効果が期待できる。そのためには Theme Report 記録様式の見直しの検討が必要である。

４．妊産婦及び新生児に関しての看護技術は、対象者に安全・安楽な技術が提供できるような技術演習、そして、主体的学習ができる環境を整えていく必要がある。

５．講義は授業内容を事前に明確に提示する必要がある。学生は事前に予習を行い、教員は教育内容の精選および教育内容を理解させるための教材を準備することが大切である。

【謝　辞】

調査にご協力くださいました看護学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

【引用・参考文献】

１）成田恵美子他．母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査．秋田大学医学部保健学科紀要；2007；15（1）：p.58‐67.

２）厚生労働省医政局看護課．看護基礎教育における技術教育のあり方における検討会報告書．2003

３）緒方妙子他．母性看護学実習を効果的にするための事前準備に関する検討 NO．1．九州看護福祉大学紀要；2008；10.

４）厚生労働省医政局看護課．看護基礎教育の充実に関する検討会報告書．2007

５）パトリシアベナー．ベナー看護論．達人ナースの卓越性とパワー．井部俊子、井村真澄、上泉和子訳．医学書院；1992．P.15‐16.

６）中島久美子他．母性看護学実習体験から見た学習効果の分析．群馬保健学紀要；2003；24：P.43‐51.

７）佐々木睦子．母性看護学実習における実践能力習得への 4 キーパーソンからの影響要因．香川大学看護学雑誌；2007；11（1）：p.17‐27.

The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
Vol. 10, No. 1, 41-49 (2010)

ISSN 1344-7505

[Study Report]

Analysis of the In-advance Preparation for Effective Maternity Nursing Practicum(2nd report)

– Based on questionnaires on the third-year students before and after workshops and after clinical trainings –

Kuniko Sakai, Taeko Ogata, Michi Harada, Mineko Ejima

【Abstract】

The maternity nursing practicum aims to integrate knowledge, skills, and perspectives developed on campus and to enhance interpersonal skills and practical nursing competencies through attending assigned patients, outpatients and childbirth. To this end, in-advance preparation plays a key role in maximizing effectiveness of the clinical field training.

"K" Nursing University has been providing lectures and workshops in advance to students to get them ready for the clinical training of maternity nursing, To verify the effectiveness of such preparation, questionnaires were conducted on students three times; before and after workshop, and after the clinical training. Results of the questionnaires demonstrated that the current style of theme report imposed too much burden on students as a preparatory work for the clinical training, and that the theme itself and the schedule often changed in the field. For achieving the goals of the practicum, changing the target of the theme report was found to assume a key role.

Key words **: maternity nursing practicum, interpersonal skill, workbook, theme report**